

頓堀の水に舟でも泛べて、見上げる月に却つて大大阪としての面目が味はへるかも知れない。

難波湯今は浮世のよしあしを、忘れてぞ見る秋の夜の月

九月 寶市

本市の利福を進むる築港成就航路安全を祈ると共に寶の市を再興せる、外國の寶船が出入千艘、大阪市は寶の市場となるべき吉兆ならんか、爲めに聊か神慮を慰め奉り冥助の程も難有からん、官幣大社住吉神社寶の市御神事再興及大阪築港成就海上安全祈禱祭趣意書

寶市と云へば南地の練物を思ふ人は多いが、築港との關係を知る人は極めて少ない。明治三十年十月十七日、即ち大阪築港起工式の當日、住吉大神を奉祀して土功の安易航運の繁盛を誓願すると同時に、中絶してゐた寶市を住吉社頭に再興し、神慮を慰め冥助を冀ふたのである。

寶市とはその昔神功皇后が寶の國を征服遊ばし、寶の船を從へて寶の物を住吉の浦邊に頒ち玉ひし故事に出づ。攝津名所圖會に

九月十三日、相撲會又寶市とも號す、拾芥抄日、九月十三日相撲會云々、社説云、相撲會に神輿を玉出島頓宮へ渡し御傳供あり、津守神主勅使代として宣命を讀、畢つて相撲十番あり、轆鼻禪の上に注連を纏て手合す、是即三韓退治の體



第百八十七圖 難波鑑 京都帝國大學所藏

を表す、財市といふは三韓より獻する貢物を當社に獻するなり、原泉州堺一津みないにしへは神領なり、此寶市を始元として唐船入津し、諸品貨物を交易す、市笑姿神も當社にあり、諸國市の始めといへり、社頭に升を多く賣買するゆへに、升の市ともいふ、又金銀を入れる器を取鉢といふ、これも同じく賣買す。

升買て分別かはる月見かな 芭蕉

今は社前の馬場に露店が出て世帶道具を鬻ぐ。

寶の市の再興に際し、西村醉處知事の斡旋で五花街からは、市女を出仕することになった。市女はおすべらかしの上臈姿で神社に詣ると、宮司は市女にそれぞれ天上眉をば點ける。それから神事に列し神前に供御を奉る。この十人の市女に稚兒、家臺、囃子を差し加へて廓内を練る。これが江南の寶市。日は翌十八日に翌々十九日の兩日。今その行列の概要を語らば、

風流傘は住吉繪に因み、松に菊紅葉をあらしひ白鷺を宿せたる山車を頂き、赤地竹屋町裂に櫻花の刺繡を施せる傘に緋紅色鹽瀬に櫻花崩し白刺繡せる幕を垂れ、蠟色櫻花蒔繪の傘軸に大綱四條にて四方に引き張れり

次に唐櫛

次に稚子は緋紅色の着付に、紫裾濃の袴、萌黄紗に金糸刺繡の水干を被ぶる者十人、傘持其他白丁に扮せる供人數多く附添ふ。

次に前家臺は、大阪に因縁深き豊太閤盛時の文物に因み、蠟色塗高欄造りとし、櫻花流水の地彫毛彫共に周密なる金色の金具を配し、二條城霞御所御物を摸して欄間に彫刻し、同御所御物四季の花の丸を金地極彩色にて上田耕冲畫伯の揮毫を煩はして格天井を造作し、正面幔幕は豊公の紋章を顯はし、脇帳は公の陣羽織裂を摸し裏地は赤地錦に五三桐平金通し、欄間掛け壁代は竹屋裂に公の垂衣を摸したる桐唐草平金刺繡である。その背後に桃山百雙の内流月槌車の圖綴錦にて織成せる見送り帳を懸垂し、十二人の囃子皆緋紅色の着付に白の水干花鳥帽子を戴き、太鼓鉦八雲琴の合奏さ

ながら見る人をして眼眩せしむる許り。殊に御大典御舉行を記念し家屋御屋根の増修に着手して、破風造二方面取り吹寄垂木にして、屋根裏總金箔に花の丸二百有餘を竹内栖鳳調伯意匠の極彩色を施し、登り棟及垂木鼻木悉皆透し鍍金地彫の金具を鏤たれば、其壯麗蓋し本邦に於ける稀に見るべき美術的家臺と稱讃せらるゝに至つた。

次に市女は上臈（上臈は公卿大臣家の女にて三位以上の女官）の姿にて、頭髮はおすべらかし、繪元結で飾り緋鹽瀬の長袴を引上げて腰にて白衣幾領を重ね、その上に五つ衣を着けた者十人。これに蟲の垂衣を着けたる市女傘、相引、差掛傘などの供人白丁姿にて隨伴する。

次に後家臺は公が一乘院より拜領し、伏見より入洛の御乗御せられし車輪（徑七尺）に朱高欄付家臺を据ゑ、四神の旗を樹て茶色地に祇園木瓜と崩し市松を配織したる胴巻を廻らし、此廓の男の子等鉦太鼓にてはやしたつる音賑はし



庫文有希 梅の花説 圖九十七第

如上の行列にて練り行く其華美なる有様豊太閤の昔、桃山の豪奢を坐ろ想起せしめる。

十月 誓文拂

なりはひのからき世をくれ夷講 かしく
夷講はまた誓文拂とも呼ばれる。もと商家が年中商ひのために演ぶるうそ虚言に、慚愧して立てた精進の一日と云ふことである。罪滅しの精進日なればこそ、内では福の神商ひ神の蛭子を

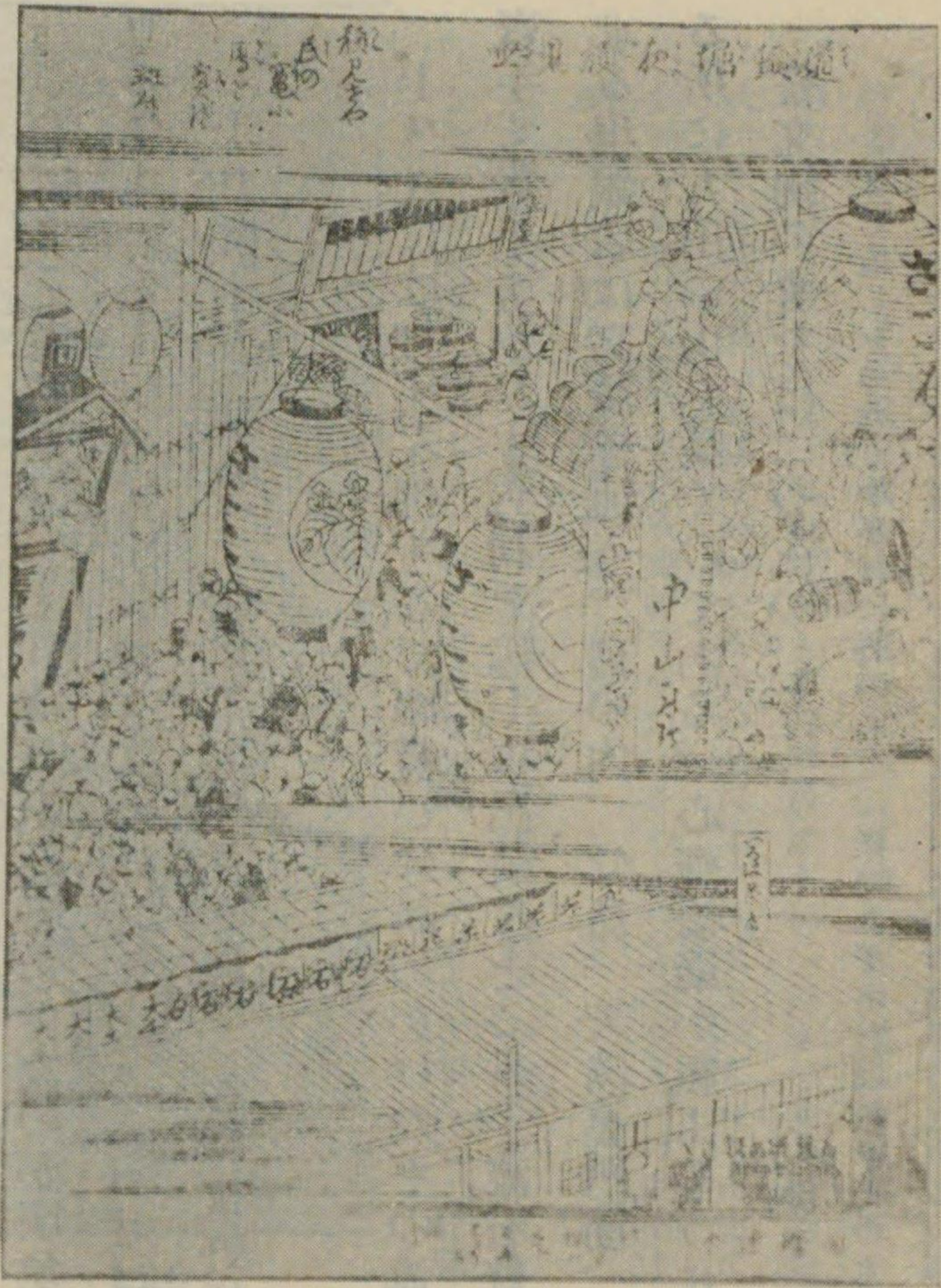
崇め、鯛を進め酒宴を張り楯で金銀を度り、膳碗器具などを千萬兩と値踏みして大商盛の縁起をば壽ぎ店頭では良品端物をば格安に鬻ぐのである。そうしてせめて今日一日だけなりとも真人間に立ち歸へり、神罰佛罰を赦されんことを偏へに願ふ。されば瀬戸物町の陶器市の如きお祭りの日までも賣出しに活用するのは、その動機をば全然異にする。爲に時人競ふてこの日を俟ちてその店頭に雲集するのは云ふ迄もなからう。利にさときは人のさが。かく買手が利口に廻れば、賣手も亦同様巧者に商機をば狙ふ。おしまひには單に書入れの賣出し日となつてしまつた。さればこそ昔は十月二十日當日のみであつたのが次第に日を重ねるやうになり、今では週日に亘ることとなり、日も十日過ぎより始めると云ふ氣ぜはしさ。

十月郊南賽 蛭祠 蕭條不似首春儀 宣應伏野橋邊路 蜀錦吳綾喚女兒

田中金峰

十月戎には押すな押すなで福貫ひに詰めかけたその連中も、この日はてんで見向きもせない。賣手も買手もひたすら利を稼ぐに出精なところ、流石贅六の眞價は充分に發見出來よう。我一に求る現銀店は高麗橋通り、島の内、堂島、天満裏門筋、船場渡邊筋、佐野屋橋筋（浪花の梅）、至る所に人出の山を築くのである。心齋橋筋が賑ふやうになつたのは、ずつと年代が下る。誓文拂の裏をば二つ三つ。

よしあしをつなく小さきに時雨して、染めたもあれは染めぬのもあり
門に入て押せとも出ぬ小さき買、はらへは跡へうそか生する



會圖所名津攝 圖十八第

十一月 顔見世

數點紅燈趨「戲場」、錦衣繡
帶贈「俳郎」、世人飽使「俳
郎」煖、不憫乞兒啼「夜霜」

田中 金峰

顔見世のその盛況はもはや見られ
ない。今では道頓堀の芝居と年百年
中明いてゐる。歌舞伎の外にも拳闘
ござれ奇術ござれ、キネマ萬歳何で
もと云ふ悪食振りである。けれど昔
なら初春の初芝居、續いて二の替り
に三の替りを打てば一休み。それから盆替りで又休み、そして霜月の顔見世となる。俳優も座附
と定まつてゐれば、芝居以外のものは一切舞臺にかけなかつた。故に芝居は明いてゐる日數よりも
閉まつてゐる日數の方がずつと多い。休場中は表口を掃き清め、半紙大の「近日より」を木戸の鴨
居に張出し、勘定場以下關係者は圍碁將棋に日を消してゐた。それほど優長なのが歌舞伎の特色
であつたから、一度場が明くと待ち焦れてゐる見物衆は、潮の如く詰めかける。殊に顔見世は來
ん年中の座附役者の顔觸を、この興行で見せるのである。

貌見せや難波わたりの春の景色 惟 中

風變りなのは顔見世が夜の興行であることである。その當初は晝夜二十日間の興行であつた。
それが後には夜十日間と模様替となる。「顔見世は世界の圖也夜寝ぬ人」(西鶴)と冷評されるのも
その由來は茲に基く。顔見世興行の次第は、

初日の前日、即ち興行が始まる當夜の夜、役者の家々は正月同様の構で飾る。そして役者は早
天に起き上下袴に羽織を引掛けて芝居に入る。一座のもの悉皆出揃つてから舞臺に列らぶ。本式
の三番叟が舞納めとなると、子役三人出で、見物に云ふ如く口上を述べる。これで役者は一先づ
我家に引取る。町觸の太鼓は芝居の銀主、手代、役者衆關係先まで、隈なく持ち歩いて打ち込む
戻れば大木戸より花道にかゝる。樂屋から此の際太鼓を合はすのである。一座の役者も折よく舞
臺に列れば、三つの太鼓一つ残つて曲打の妙を出す。かくて打ち切る合圖に役者衆は、一度に
手を舉げて目出度と壽を述ぶ。

自宅の役者は晩にお雑煮を祝つて二番の太鼓を待つ。一番太鼓は暮六つに入れ初夜に打ち切る
二番を合圖に上下の出扮で再び樂屋口より入り、役者たちは互に目出度と壽をのべて、舞臺に上
り矢倉舞臺に三拜してから樂屋に戻る。二番を四つに切ると三番太鼓、それが九つに切れると、
棧敷には座本の行燈、茶屋の軒づり、天井舞臺の提灯に、それ／＼火が點ぜられる。手打の連中
は揃ひの衣裳で舞臺の前に居列らぶ。かくて三番叟が始まると云ふ段取。三番叟がふみはると
座附の引合せになり、最氣の衆中は舞臺狭ましと進物を積み上げる。座本を始め太夫、子役、若

衆形、娘形、若女形、立役と次々引合せ、手打連は銘々頭巾を被つて役者衆に進物を贈くる。その時々歌に合せて拍子木を打ち、興をば添ゆるを例とす。歌には初市、藏立、橋盡、大矢數道成寺、商人八景、川口八景など数々ある。

一順引合せが行き亘ると、役者は樂屋入となる。次で三社が出て所繁昌芝居繁華と舞納める。それから愈々顔見世狂言上中下と三段。明六つに果ての太鼓で打ち出し(戯場樂屋圖會同拾遺)手打の四連中と云ふのは、即ち大手笹瀬、藤石、花王のこと。大手連は大手筋の河内屋孫兵衛大和屋八郎兵衛の肝煎(享保二〇)、笹瀬連は笹屋小兵衛、瀬戸物屋傳兵衛の肝煎(享保五)、藤石連は板木屋の藤村某三味線屋の石村某の肝煎(明和七)、花王連は藤屋直助の獨り肝煎(安永四)。連中の出で立ちば津南雜記に、

明和の末安永の頃には、一樣に着付黒き金巾木綿に帯は白紙、いさゝか金糸にて霞か觀世水のたぐひの縷を置き、染込の頭巾も緋紋羽と變じ、笹瀬大平の合紋を切付けたり、當世より見れば甚だ麗服なれども、諸見物これを見て華美なること、いひあへり、藤石花王連始まり四連となりしより、互ひに手打の巧拙を争ひ、天明の頃より手打の曲に合打といふことを始め、或は琴三味線を交へ近來は種々の造り物をせり出し、釣もの道具遠見など、仰山になりゆき、その趣向に應じて打つ人の着付に、引糸の仕かけありて目ざましきこと筆紙に述べがたし、かゝる浮きたる一群の中にも、老年の魁首ありて、笹瀬大手は享保以來の法令を亂さず、その規模とするは本舞臺の大幕、棧敷の高欄幕、破風の鱗水引幕など、年毎に新調して、角中兩芝居へ送れり、里俗女夫連中と呼び、都鄙の見物、笹瀬大手兩引の幕を見れば、大阪の歌舞伎芝居と思はぬやうになりたり。

と。その後手打連中の扮装は、黒の熨斗目の着衣に連中の紋、赤の長頭巾に紫檀の柏子木となつ

たこのことである。

明治となつて十九年の師走月、久し振で顔見世が復活された時には、最早大手、笹瀬、藤石、花王の連中はゐなかつた。そこで詮方なく役者連が手打に廻つて、舞臺は子役に委ね辛うじて、その昔の倂を偲びしと聞く。



圖一十八第 狂歌夜光玉 鹿田一文一氏所繪

十二月 歳市

江戸の吉原駕、京の黒木賣、大阪の順

慶町夜見世 三都自慢鏡

歳市とは年末にお正月用の品々を賣る市である。だから百貨店などがやる歳の市とは、一寸趣が違つてゐると思ふ。

大阪では西横堀江戸堀(難波雀)に開かれた時代もあれば順慶町の夜見世(攝津名所圖會)で行ふた時代もある。抑もこの順慶町の夜見世こそ

高麗唐土はいざしらず、我日の本の君が代に、かゝる目出たき夜の景、繁花を極めしありさまは、餘國にたえてあるべからず。 廻街噺

と贅六の鼻高々と威張つたもの。陽西山に没すればこゝ順慶町の通りは、井戸の辻を中心に東は

堺筋から西は新町橋までの間、左右両側とも尺寸の隙なく夜見世が出るのである。年市ならまづ蓬萊の飾物何や榎と穂俵、裏白から鋤藁、新曆、毬打、羽子板、手鞠、門松と賣る。睦月にはお年玉、彌生には雛、端午には武者人形や早松茸に孟宗箒まで、水無月には夏祭の大市、盆には靈祭の典物、重陽には菊花、それに衣服あり道具あり袋物あり下駄も揃つてゐる。よろづ品々がふんだんにある例として、瀬戸物なら今利、印部、六兵衛、茶瓶、室山、天目、行平鍋、染付茶碗、植木鉢の類までである。十九文の均一店に奈良茶飯、賣卜者に輕口噺、影畫にばいの獨樂。北山なればつまみ食、迷へることあれば身上の占と、搔ゆいとこまで手が届く。念が入り過ぎしにや、剪絡之賊まで出沒するには、一寸迷惑千萬な話。市人が出盛るのも、無理はない。

加ふるに尙西すれば橋一つ、瓢箪町の夜見世はつひ眼と鼻の先、瓢街は浪華隨一の喜見城、歌舞の菩薩の在します地、さぞ行き過ぎて曉の、鐘を聞いた遊子も少くはなかつたであらう。廓開發の當座こそ夜見世なるものはなかつた。が延寶年中に正月から十月までは赦免となる。しかし霜月極月は依然として、暮限に東西の大門を閉ぢねばならなかつたのである。それも享保年間に赦免となつて、夜見世は橋の西も東も、四六時中繁昌することゝなつた。

その全盛は狂歌に順慶町夜店百首となつて残る。

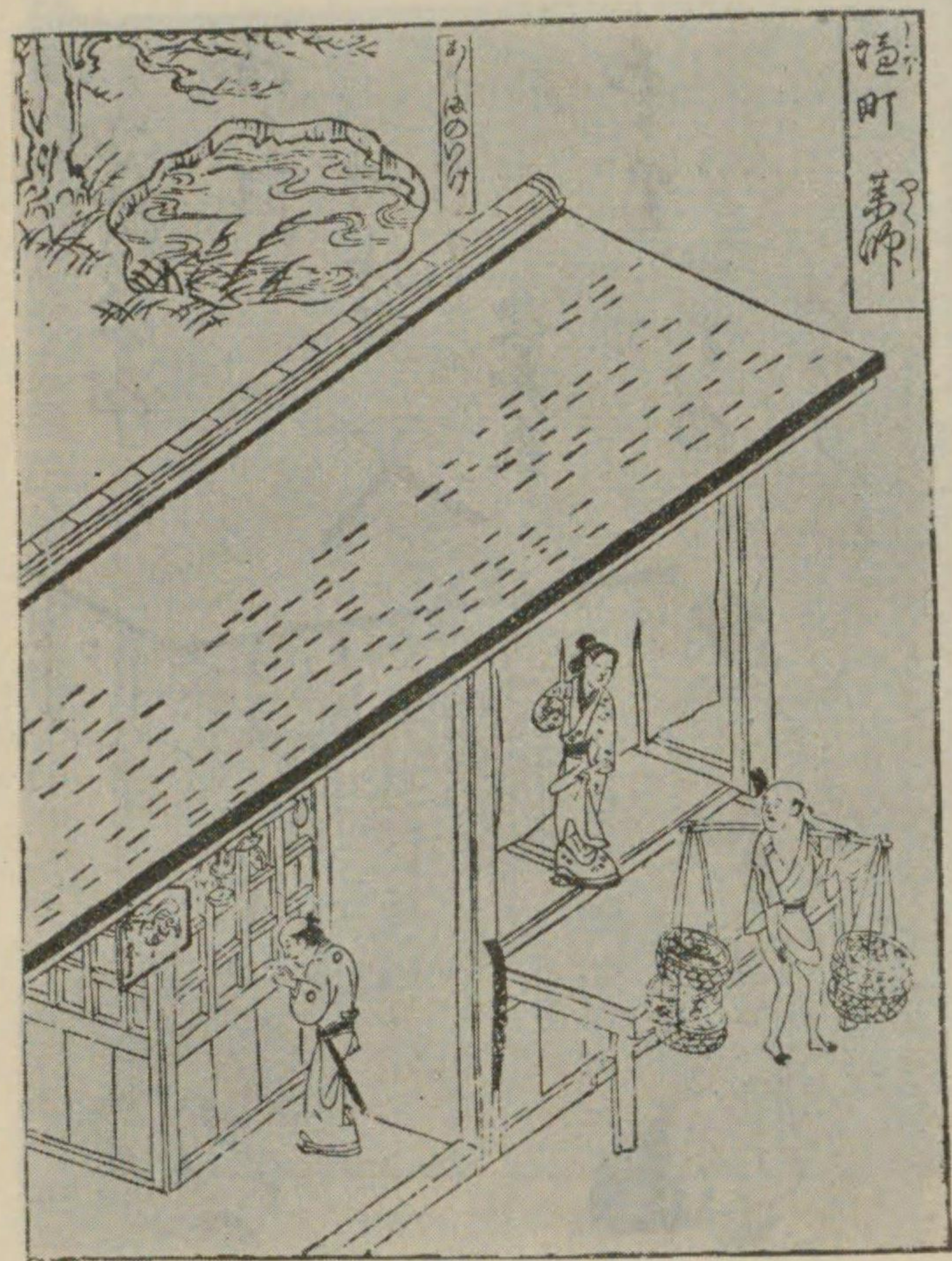
賣も買もこゝろの胸やいさむらむ、瓢箪町を出ぬけたる市
はいからのこまかに心つけて賣る、これはよい利に廻りやすらん

栗 洞
負 米

〔佐占〕

第十四章 南區の郷土

地名の由來に社寺の由緒、古木の來歴に名水の傳説、南區の郷土が有てゐる誇りのくさくさを、



藏新氏太利木高 船分 蘆 圖二十八第

そこはかとなく綴り寄せて見る。曉鐘成 雜學の大家で、その著はすところ、實に頭身を超ゆ。遺稿攝津名所圖會大成は特に著聞。妻のおりうは瓢街の育ち。霸氣滿々の彼はこの述作三昧で我慢し切れず、鹿廼家(料理) 美可利家(席貸) 豆茶屋(茶店) 手鍋庵をやる浪花崎人傳中の一人。

蘆間の池 片葉の蘆が出来るので著名。古歌によく散見する。一に井

池とも呼ばる。(第八十二圖参照)
何とわれ蘆間の池のみくり繩、人くるしめに世にまじりけん
安堂寺橋通 安曇寺の舊趾。寺名轉訛。現一丁目明善寺境内の油掛地藏は、即ち安曇寺石像であ

夫 木

ると傳ふ。後背に「天平十一年安曇寺安置」の銘ある由なれど、磨損して今は認め難い。寺は
 由緒に富み、紀孝徳、白雉四年の條に「僧旻法師臥病於阿曇寺、於是天皇幸而問之」と見ゆ。
 尙續紀聖武天平十六年の條に「丙辰幸安曇江、遊覽松林、百濟王奏百濟樂」と見ゆる安曇江も
 亦此附近なるか。出據寺名。(第八
 十三圖參照)



庫文有希 鏡品伽御本繪 圖三十八第

は石屋が多かつた。それで濱先には種々雑多な石材を置く。攝津名所圖會に、

「長堀の石濱は山海の名石、あるは御影石、立山、和泉石など諸國の名産をあつめ、其好みに従ふて石ノ鳥居、石ノ駒、
 大燈籠、水鉢、石臼、地藏、大日、不動、阿彌陀、石碑、道標、石橋、井筒、石風爐、孝行白まで拵へ買ふなり」と。
 出據商業。(第八十四圖參照)

操 橋(舊) 道頓堀川、戎橋の舊稱
 橋の南に竹本の操がある。今の浪
 花座は竹本の跡。出據在操。
 幽靈新地(俗) 難波入堀川沿ひの岡
 場所、妓家より半身を出してもし
 く〜と招きし故、出據振舞。
 生駒町(舊) 生駒家の邸址。出據邸
 名。

磐舟橋 高津入堀、下照姫命が天磐船に乗つて高津の地に到るの故事に因む。出據故事。

鰻 谷 鰻谷の舊地、出據地勢。

梅之橋 梅川(元) 川沿ひは梅林の名所、今は石橋高津社境内に在る。出據樹木。

戎 橋 道頓堀川 今宮戎の參道に當
 る 出據社名。

縁切橋(俗) 道頓堀川、相合橋の異稱
 相合の名に相應からずして、男女連
 だちて此橋を渡ると必ず縁切ると傳
 ふ。故に嫁入縁談其他一切の掛合こ
 とに此橋の通行は禁物。出據迷信。
 焰硝山(俗) 幕末高津御藏跡地に、白
 焰硝製造用の硝土を買溜め堆積す。
 出據山名。



合圖所名津攝 圖四十八第

御藏跡町 高津御藏の址。出據邸址。

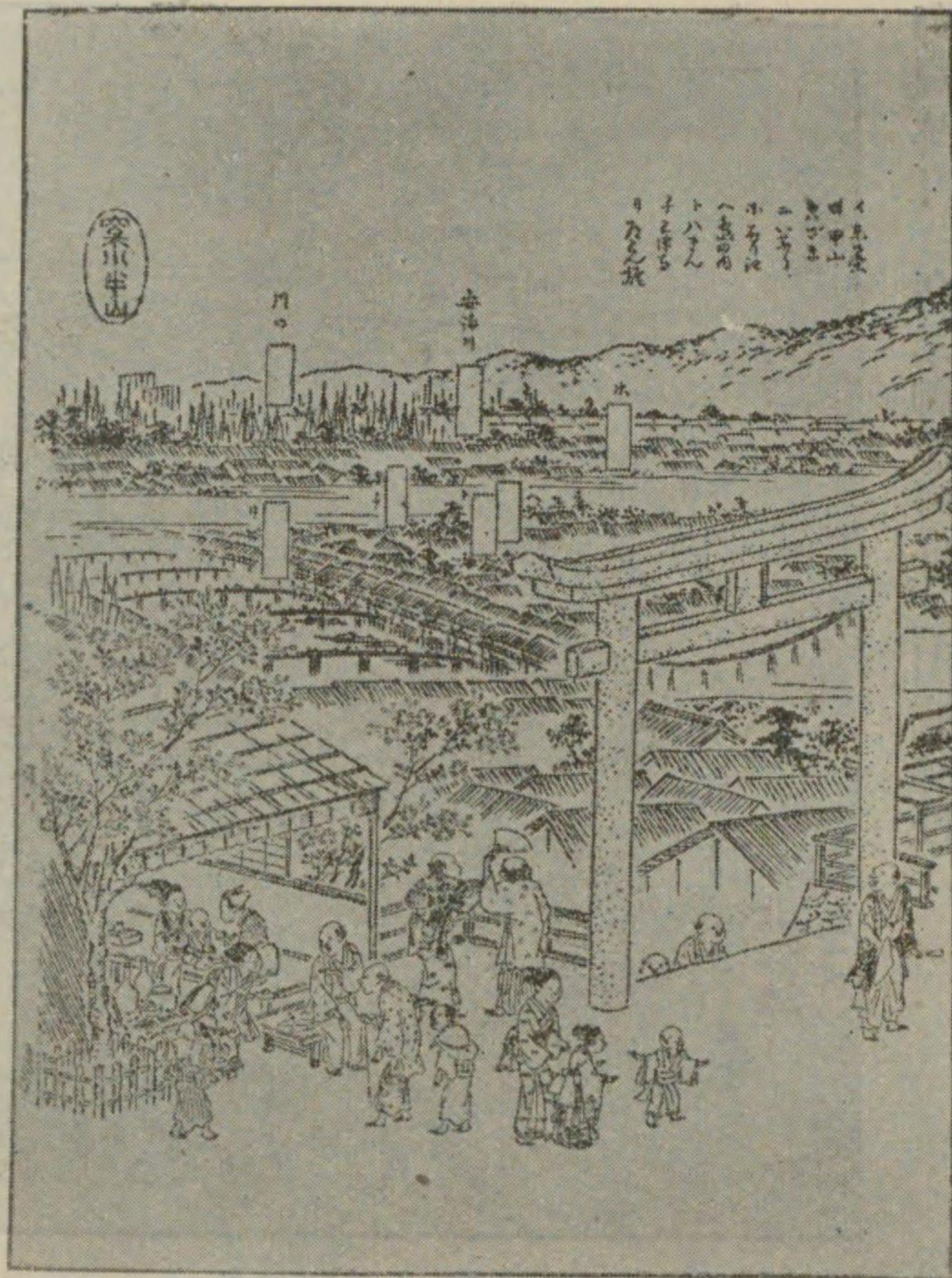
高津黒焼 高津の西阪にある。大鵬の翼から蝸牛の角まで鳥獸蟲を一切、黒焼にして賣ふ。時人
 その効能を賞めて店頭に群る。

高き屋にのぼりて見れば烟たつ 是も名におふ黒やきのかま

鶏 成

高津神社 祭神は仁徳帝、攝社に比賣許曾神を祀る。上町の丘陵に位するを以て、西望一目の便あり(第八十五圖參照) 梅の亭、舞臺はこれが爲に名を賣る。攝津名所圖會大成に

浪華の市中薨一圓に濤の如く、河口には出入の千船百船海原に浮める白帆の光景、淡路島山須磨明石、武庫山に連る峰々、一眸の中にありて風景第一の勝地なり、さる程に常に遠眼鏡を置いて詣人を歡ばしめ茶店の湯豆腐は世に名高く、社參の貴賤こゝに懸ひて、



圖五十八第 攝津名所圖會大成 (柳原喜兵衛氏所藏)

高津橋 高津入堀 地名高津より出づ。出據地名。

附近に柳娘の名物あり。浪花珍聞に

高津橋よりわづか西岸一丁を距る所の柳

の木を橋の上より眺れば島田娘の姿と見

へると有情につらされ見に行く人が此節

相應にあつて白中よりは夜中がもつとも

はつきりすると

薄暮る、姿の涼し夏木立

高津町 攝津風土記云「難波高津者、天雅彦天降之時、屬天雅彦而降神天探女、乘磐船而至于是以天磐船泊、故號高津」。現に磐舟橋もある。

久方のあまの探女かいはふねの、はてし高津はあせにけるかも

萬葉

中古郡戸(王子記)古宇津(太平記)郡戸若くは瓜生津(攝陽群談)と書換たれど讀み難く本に復す(寛永二)。出據地名。
鐘筋(俗) 東突當り下寺町大蓮寺に釣鐘がある。出據寺鐘。



圖六十八第 攝津名所圖會

瓦屋町 三町人の一、寺島惣左衛門拜

領地(元和元)。代々御瓦御用を勤

め且瓦師支配を預る。拜領地四萬六

千坪に瓦製造場瓦土取場を設く。出

據職業。(第八十六圖參照)

空堀町通 大坂城築城の際に於る外濠

の址。尙同三丁目には秀吉が設けし

茶亭ありし由。出據堀名。

久左衛門町 道頓堀開鑿に従事せし安

井出入の百姓の名。出據人名。

菊畑(俗) 西高津新地六丁目の岡場所。菊畑の間に青樓存す。出據町勢。

吉左衛門町(舊) 道頓堀開鑿に従事せし安井出入の百姓の名。出據人名。

吉助牡丹 吉助は植木屋の通名で松井の姓。元祿年間より植木商を營む。四六時中栽樹花木の美を賞でられ牡丹が特に有名であつた。

軒におほひ庭にのべふす松がえも、共に千年の陰は見えけり

濟 繼

過松井吉助園

早野思齋

砌畔長條綠蔭遮

盆中寸草護奇葩

十字街頭門別發

牽駝養視幾人衆

蝶鳥のあかずに遊ぶ牡丹哉

慶 子

唐めきし花の匂ひの深見草、沈香亭のこれやうつり香

桂 影

魚ぎよ口こう(俗) 長町在、切賣の魚店群住の地。出據商業。

九郎右衛門町 道頓堀開鑿に従事せし安井出入の百姓の名。出據人名。

藏前町 難波御藏の前。出據邸前。

黒船新地(俗) 岡場所の名。千日に新地出来(明和六)。新地は獄門に向面す。依つて院本五大

力中に見ゆる獄門の庄兵衛、黒船の忠兵衛を刑場の獄門と新地の呼稱に繋げしもの。出據比喩。

祇園町(俗) 難波新地二丁目の異名、岡場所にして其の繁昌を京祇園に較べしか。出據不詳。

極樂橋(舊) 極樂川(元) 寺町並に四天王寺の通路に當るので、極樂に通ふの洒落。出據比喩。

米相場濱(俗) 道頓堀久左衛門町米市市立の地(寛政六)。出據在市。

島之内 (1) 難波古圖を引き難波島の中の省約と説く攝陽奇觀(2) 難波八十島之内が後世簡約さ

れたものと解する陽臺地名考按第一説の論據とする難波古圖が、極めて危ぶないものなるは人

ぞ知る。更に難波島の存否如何を考察するがよい。蘆分船・攝陽群談以下に見ゆる難波島(河

村瑞賢が河道整理でぶち切つて、月正島・難波島に分けたと云ふ)は、勿論埒外としても、

上難波島は今のばくろう町仁徳天皇の地下難波は今の難波村牛頭天皇の地にて、道頓堀より西南は都て下難波といふ、

みな島々にてありし難波島の内 攝陽奇觀

といふのに適つた史實が果して獲られるだらうか。上難波村・下難波村の稱呼はあつたが、それを直ぐさま移して難波島に欲めることはどうかと思ふ。翻つて上難波村の北に、歴乎として津村が存してゐた一事はよくその無理を裏書する。それに島の内の地を以て、難波村とするにも確證をば缺く。もし史料を漁るならば、

一大坂市中所々在之候阿波座村・三ツ寺村・上難波村・敷津村・渡邊村・津村の墓所は、以來下難波村墓所へ、千日寺

聖ともに一ヶ所に寄之(中略)千日の聖六坊と相成候事云々

一元和五年末九月、北舟場、南舟場の外、津村・敷津村・阿波座村・上難波村・南渡邊村・三ツ寺村・西高津村・川崎村・天

満村・中の島・九條村・寺島・勘介島等丁家不殘出来申候(下略)大坂濫觴書一件

かく却つて藪を突いて虎を狩り出す破目となる。難波島の中の地名に至つては、取り立て、批判する方が野暮。要するにかゝる間違の基は難波島と讀むにある。率直に難波島と訓めば、そんな怪我は免れるのだ。第二説の根拠は茲にある。難波島とは難波津・難波海・難波里・難波宮・難波人・難波男・難波女と呼ぶのと同様、浪華に於る島々の意、換言すれば難波八十島と解くのである。わが大阪が淀川の三角洲の上に築かれてゐることは萬人の俱に承認するところ。難波八十島の古語は、即ちこの三角洲を指すに相違ない。無論島の内もこの難波八十島の一である。勿論八十島の名が示すように、大小無数の島嶼があるのに、この島だけが格別に島之内と號けられるのだらう。船場・下船場は業に豊大閣のとき城下町となつてゐる。しかるに南寄りの此處ばかり

は、城主松平忠明が安井九兵衛に命じて、開發せしめるまで取殘されてゐた。九兵衛は南堀（後の道頓堀）開鑿の先達である。そんなところから恐らく割出されたものとするが妥當であらう。

〔島之内異義〕しま（妓邑）の名。南塗師屋町（中橋筋）道頓堀御前町（太左衛門橋筋）道頓堀布袋町（疊屋町筋）の三筋を云ふ。白人の本場で知られ、戀の重荷のナア島之内と謳はる。

太夫の美なるは櫻にひとしく花の玉にして雲上に氣高くものかず言はず、春の夕邊の鐘の音にしどけなくも散りかゝる眺めにも似たらんか、白人は牡丹の花ならん華美にしてしゃんとしてとりわき花の富貴なるものにして、名に高き判官の露をふくむ花のもとに戯れ離れがたくもより添ひてねむりを催す有様にも似たるべし。

新 戎 橋 道頓堀川、上座に戎橋、下座に大黒橋、其中に割込み更に新橋が架る。中橋とするのも月並だし、新橋とするのも智慧がな過ぎる、一層新戎橋と擔ぐのも一興。出據橋名。

第百七十八圖 難波鶴 希文有庫



心齋町(舊) 新羅町の轉訛。出據出生。

新 川 橋 難波入堀、難波入堀一に難波新川と云ひ、尙省略して新川とも云。出據川名。

淨國寺町(舊) 淨國寺の址。出據寺名。

新屋敷 江南に連なる岡場所、新規に繁生した由縁を以て新屋敷と名付く。菊屋町に屬する小路、藝人の居宅を構ふるもの又多し。

とかく近年は女郎大きに花やか相應の全盛賑ふこと也、此所の置屋の大將は吉野屋女郎敷多あり、續いて播新きつま屋よき代物を出す、何でも今一段はやらそふならば、此通り筋の町幅をモウ五六間廣うして、西の濱のつき當て柳のある所に出口の門をこしらへ、東のすだれ屋のある所に同じく門を拵へ御堂筋から道頓堀へ渡るやうに橋をかけ、女郎にも禿を付け日傘を男にさしかけさせて送り込み、新町のうつしを仕たいと此所に年古い分別がいわゆる、故、成程それは能らふが先づ引舟禿引つれては、夫程の人数の入る廣い呼屋が有るまいといへば、イヤ／＼禿やかき持の男は表の店に腰掛けさして置とある。藪醫か山伏の供のやうでおかしからといへば、イヤまだかんじんの事を忘れた、やり手に跡から蒔繪の竹の筒に線香入れて持たすと、やつぱり新屋敷が離れいでおかし。

浪今今八卦

順 慶 町 筒井順慶邸の址。町は古來夜店を以て著る。狂歌に「順慶町夜店百首」如棗亭栗洞詠あり。其の一二

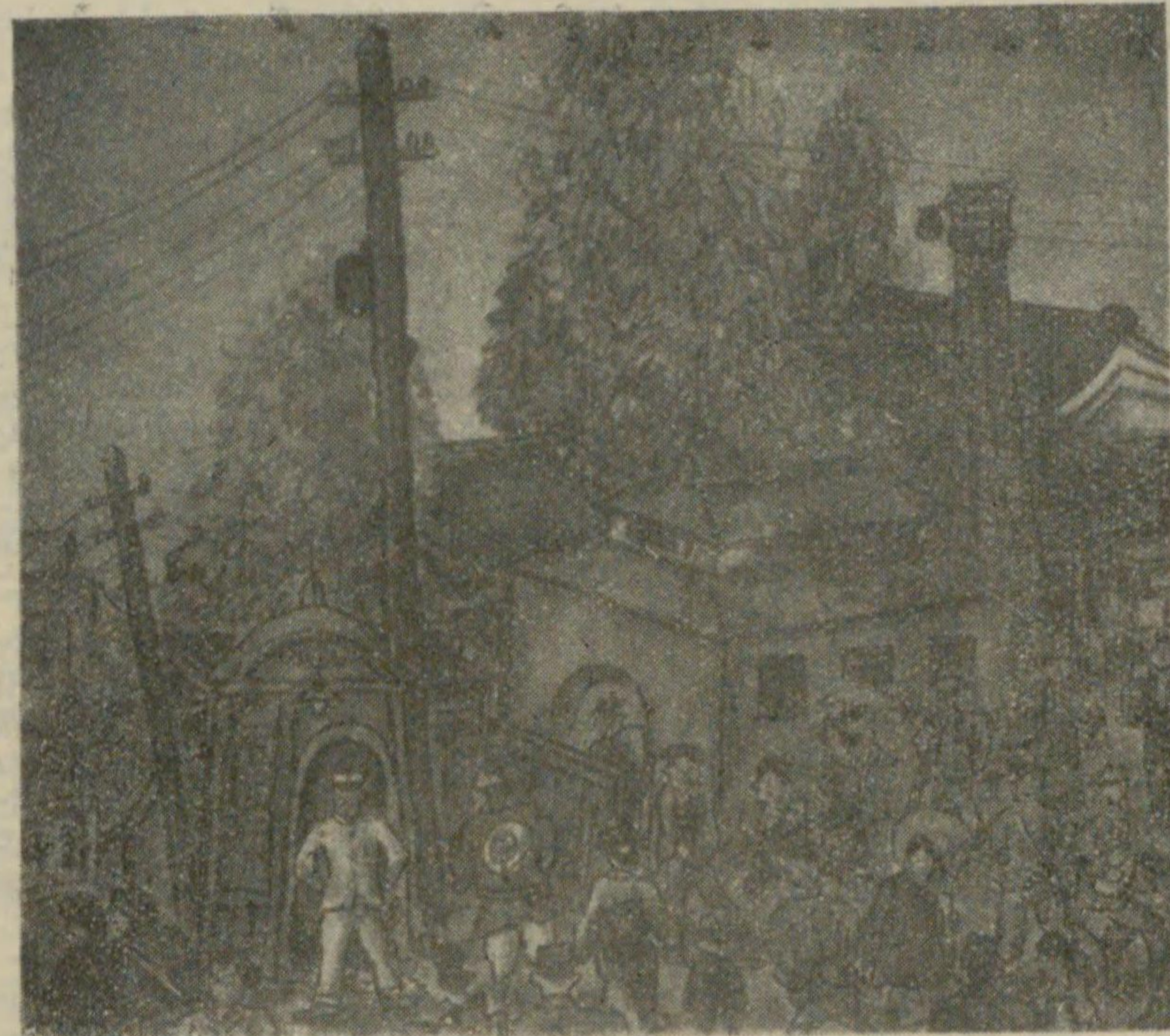
煙草店 黒船や庄兵衛もなき新町の、橋詰へちよといつるたばこや
奈良茶飯 いにしへの八重櫻よりけふこゝの、えもいはれざるこちやなら茶飯

末 吉 氏 末吉橋西詰角屋敷は平野郷末吉孫左衛門別業のあつた址。

末 吉 橋 通 平野郷末吉孫左衛門別業の址。出據邸名。

千 日 前 千日寺と云ふ精舎の址その千日寺は法善寺の別名である。寛永年間より同寺に於て千日の念佛を修行した。千日寺の名茲に始まり、爾來不斷の念佛道場となる。本尊は阿彌陀如来弘法の作。境内の子安地藏大菩薩は小野篁の作(難波鑑・寺傳)。一説に千日寺を以て竹林寺と

なすものもある（大阪府全志）が、恐らくかゝる錯誤は古地圖古地誌の検討上の懈怠に胎胚するらしい。新板攝津大坂東西南北町島之圖（拙書古板大阪地圖解説所收挿繪）・蘆分船・難波鑑・



第八十八圖

難波丸・難波丸綱目ともに、法善寺を以て千日寺・千日堂としてゐる。竹林寺説に役立つものは唯一つ攝津名所圖會の挿繪があるのみ。けれども圖會は畢竟するに圖會以上に出るべきものではない。まして圖會が世に流行つた時代の地圖でも、いづれも皆法善寺・竹林寺と並書してあつて、決して法善寺・千日寺と記載してゐないのである。

松平忠明の市街整理に際し墓地も亦整理されて下町はすべて下難波村のこの地に移された（大坂濫觴書一件）。界限に千日寺の靈場を控えてゐるので千日の三昧と呼ばれる。爾來お處刑場しおきばが設けられたり長吏ながつなきが置かれたり、それからそれへと物騒なもの、掃き溜めとなつた（舊千日の考證は拙稿千日前圖會に譲る）。それが御維新となつて、一切合財取り壊されて了つた。が永年人々の頭腦にこびり附いてる暗い千日前氣分は、一朝一夕に晴やかとなるものでない。拂下げを受け

た玉川章がいくら開發を策しても、たれもかれもが尻込みをするばかり。物好にも唯奥田辨次郎の妻女お文さんが、何んかの目算あつて先づ見世物小屋を掛けたのが抑々の皮切りと聞く。しかしなか／＼人は寄りつかぬ。よつて小屋附近へ露店、屋臺店を出して貫つて景氣附けをし、極力人よせを圖つたもの。兎角するうち何分道頓堀を控へてゐることゝ、次第に人氣も出て來て見物も集り、日一日と繁盛を加へた。かくて千日前は歡樂境として再生し、お文さんは草分の手柄を贏ち得たのである。

鬼哭啾々たる千日が現身成佛の樂土と化してから、まだ五十の星霜しか関みしない。それでも有爲轉變の激甚なことは一驚するに足る。もう常の家のヘラ／＼も見られぬし、松喜の生人形も拜まれぬ。名物の二輪加も廢たり錦影繪も閉めた。市電は千日を眞二つに割いて東西に走るし、痴話小路（竹林寺北横の小路）も明るくなつてその實を失ふ。かく千日前は時々刻々故き殼を脱ぎ捨て、新しい衣に更へる。その昭和の服飾を贅六はシネマとジャズの行進曲と名付けてゐる。

宗右衛門町 道頓堀開鑿に従事せし安井出入の百姓の名。出據人名。

大黒橋、道頓堀川、上座の戎橋に對稱せるもの、蓋し七福神中特に戎と大黒とは好一對であるから。出據比喩。

大寶寺町 大寶寺の舊址。出據寺名。

高原（俗） 一帶の地高く廣漠、従つて高原とも又野漠とも云、高原溜、岡場所ありし地、出據

地勢。

竹横町(俗) 辨天座西横の俗稱、同座の舊名即ち竹田芝居の横町の義。出據芝居。(第八十九圖参照)
太左衛門橋 道頓堀川、橋の南に大坂太左衛門の芝居(今の角座)がある。出據芝居。
丹波屋町(舊) 丹波屋新左衛門の邸址。出據邸名。

請看小川三浦役料出御姫三外鹽
遣四文錢
一百好携九四銅竹田欲見坂町東
三文投出求通札半量代籠在其中
過道頓堀
負大手常盤外藤石千年鞆組泰
回首開帳兼劇場挑燈無處不盜賴

庫文記社侶玖 子獅華浪 圖九十八第

土取場(俗) 寺島藤右衛門拜領の瓦土
取場(寛永七) 一に瓦屋藤右衛門請
地と云。出據職業。
井池(俗) 蘆間池一名井池の址。蘆
間池は古來片葉の蘆を生ずるを以て
著名。出據池名。
中橋(舊) 道頓堀川、相生橋の舊稱
甲乙兩橋の中に設けられた新橋の意
出據構置。

長町(舊) 紀州街道筋沿ひに出来し狭長の町。出據町勢。

名吳橋 高津入堀、往昔の名吳浦名吳濱は此邊とか。出據浦名。

きてみればなこのうらまによる貝の拾ひもあへず人を戀しき

六帖

並木正三 脚本の奇才でなほ舞臺の改良にも功を成す。追上廻舞臺、宙釣等はみな正三の工夫

に俟つ。遺著容顏美艷考は化粧研究書として業に定評がある。

野漠(俗) 土地一帯高原にして廣漠故に一名高原とも云。後岡場所出来観音坂の下に在。六軒
と連接す。出據地勢。

八幡町 御津八幡宮の地。出據社名。

御津八幡宮 應神帝を祭神とする。その昔宇佐八幡を城州男山に勸請の途次、一時中憩せられし
地と傳ふ(社傳)。

境内に相生の松がある。女松男松の相生で珍らしがられる。

初瀬町(舊) 舊稱を吉野屋町と云、吉野屋某退轉後、初瀬町と呼ぶ。蓋し吉野と初瀬は相隣の名
所なるが故か。出據比喩。

灰山(俗) 千日の焼場の址。出據焼場。

濱松歌國 狂言作者でその遺稿攝陽奇觀、許多脚色帖(吉野五運氏秘藏)は、好事家の垂涎する
ところ。本名を布屋清兵衛と云ふ。家は代々木綿問屋。

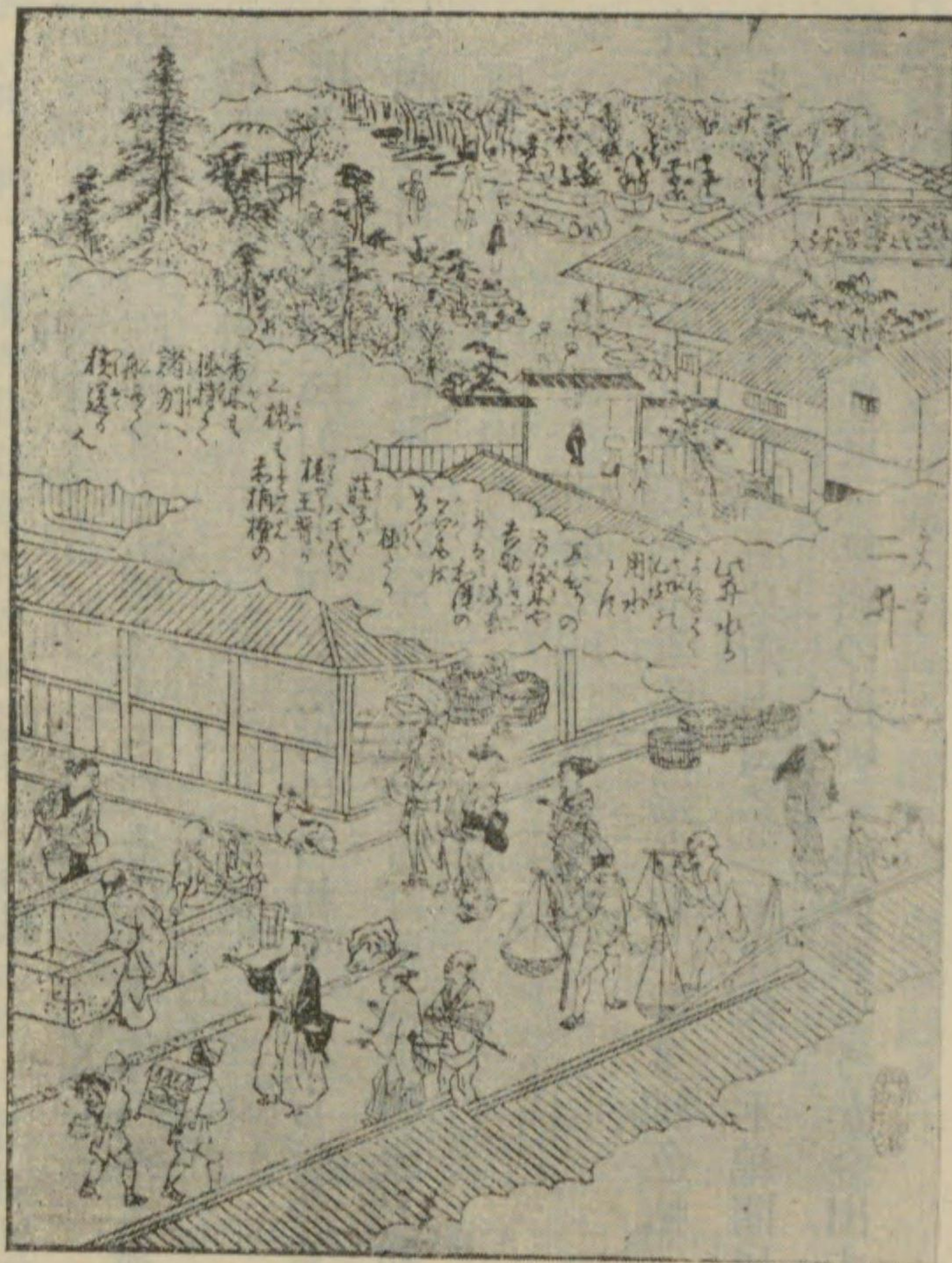
髭剃(俗) 千日東、無頼の徒の、地髭剃らうか金出すかと脅迫せしより其名起る。岡場所の一
出據振舞。

二井戸町 二井相並び、難波の名井二井戸の址。出據井名。(第九十圖参照)

堀の内(俗) 千日の長吏邸の内、四周堀を廻す。出據在堀。

堀の側(俗) 千日の長吏邸外西堀沿ひ。出據在堀。

布袋町(舊) 江南の白人の本據、世間は白人を指して子供衆子達共と呼び慣らす。その子供衆の群居をば布袋の好尚に揶揄す。出據比喩。
 本京橋町(舊) 京橋一丁目の代地。出據町名。



會圖所名津堀 圖十九第

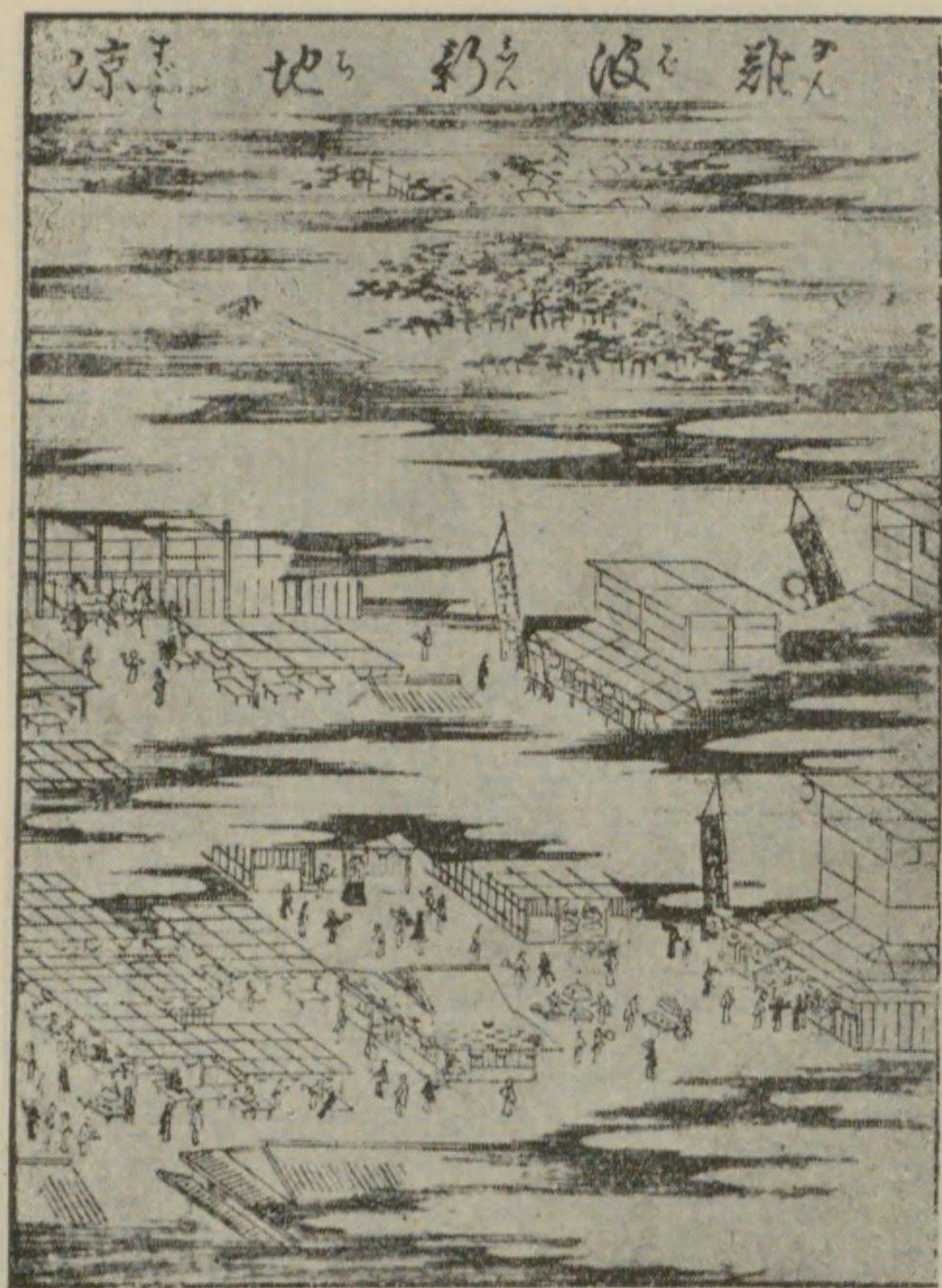
の舊稱、末吉孫左衛門の架設。出據設人。
 松原町(舊) 御津松原の舊地。

大伴の御津の松原掻き掃きて、われ立ち待たむはや歸りませ。

萬葉

本相生町(舊) 相生東町南側西半、同西町南側の代地。出據町名。
 堀 初 橋 高津入堀、高津入堀、難波入堀、鮎川との連絡(明治卅一)に際し、堀初めし箇所に架設出據構置。
 堀 止(俗) 高津入堀の終止地。後鮎川、新川(難波入堀)との聯絡成る(明治三十一)。故に堀初橋も起る。出據地勢。
 孫左衛門橋(舊) 東横堀川、末吉橋

御津水門、御津濱、御津江、御津浦と古書に見ゆる御津は難波津の美稱。出據地勢。
 松屋町 松屋某の邸址、出據邸名。
 溝の側(俗) 高津入堀に注ぐ極樂川の井路址。出據在溝。
 溝の側(俗) 難波入堀に注ぐ溝の址。出據在溝。



庫文希有 めがなの花浪 圖一十九第

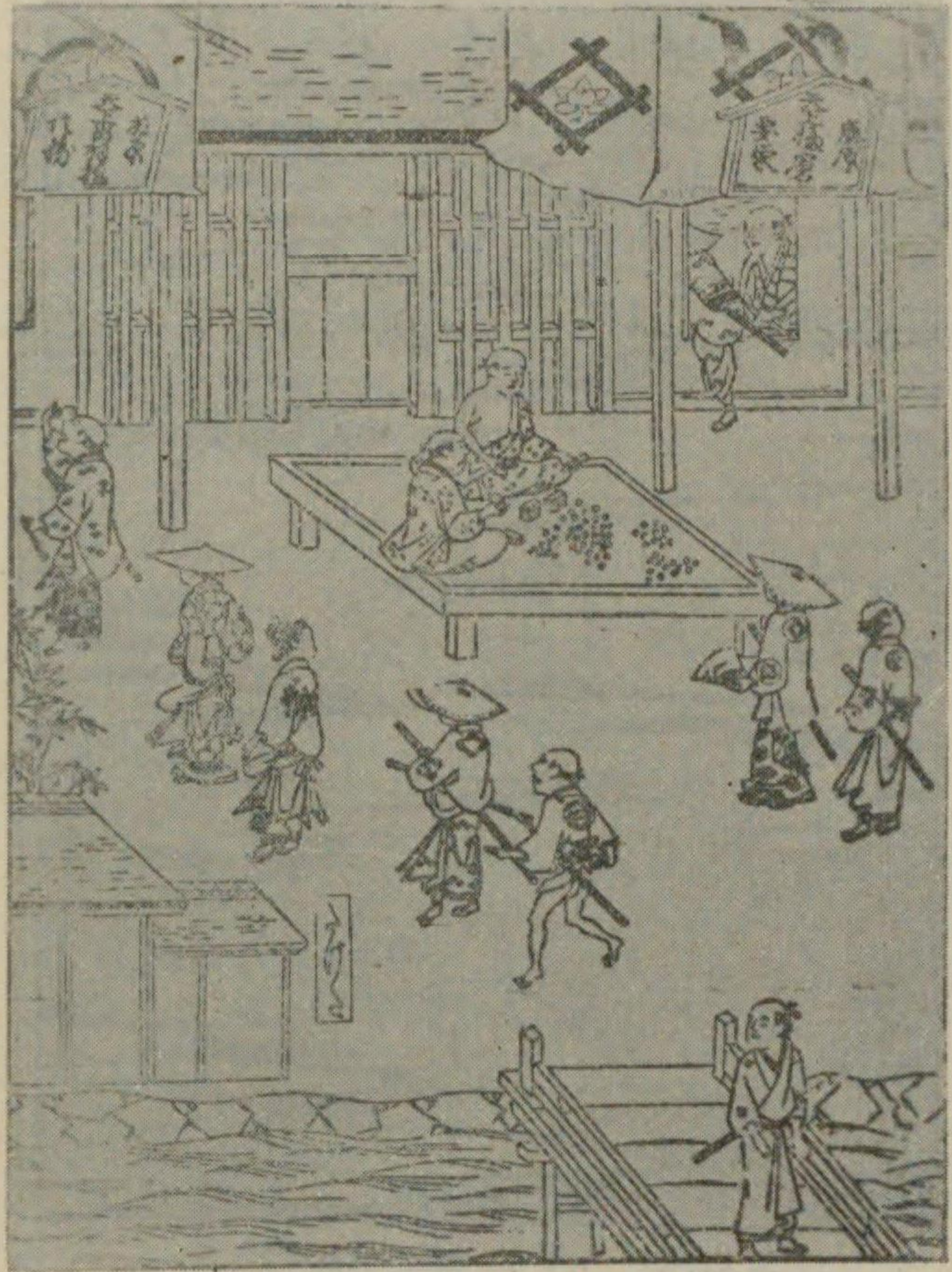
千日が拓ける以前はこの溝の側が見世物小屋の本場であつた。溝の側は難波新地に屬し、今は漸く夜見世で知らる昔はあたり一帯廣つ原で夕涼によく、故に難波新地の涼(第九十二圖参照)と謳はる。

三津寺町 三津寺の地。行基開創、本尊傳聖德太子作。出據寺名。
 三津寺 七寶山大福院と號し、僧行基の開創に係る。本尊は十一面觀世音

(寺傳)

元堺町(舊) 元堺町の代地。出據町名。
 元伏見坂町(舊) 元伏見坂町の代地。出據町名。

桃谷町 土地に高低があり、其間桃林多かりしと、花時は宛ら紅雲彩霞の武陵桃源の仙境。
 櫓 町 芝居櫓の立並び、四十八軒のいろはを、染抜きし紺暖簾に「はなやかな出入や春のいろは茶屋」と讃られた町筋。出據芝居。

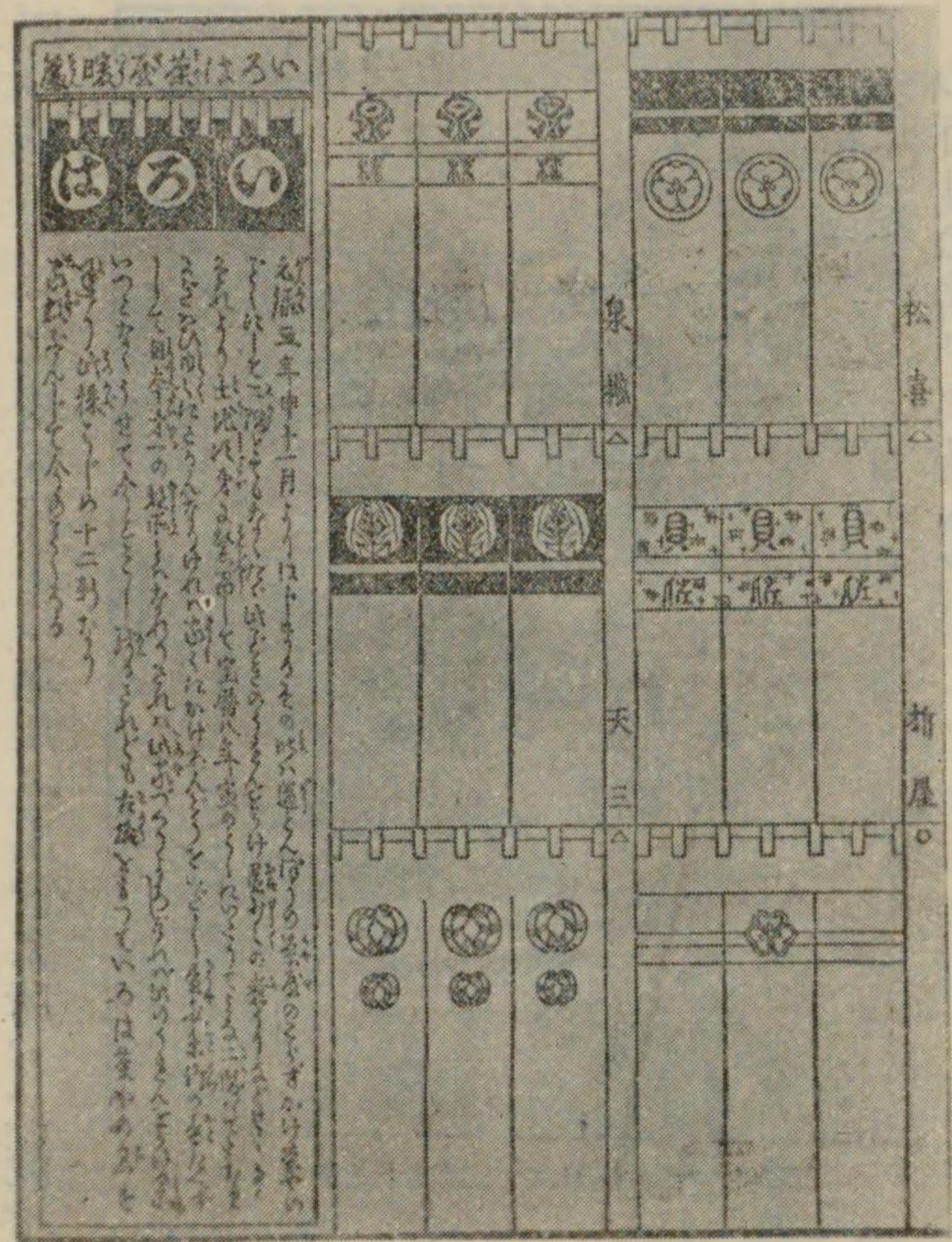


高木太利氏所藏 船分蓋 圖二十九第

道頓の南堀開鑿はこの方面の市街化を促進した。彼の志を繼ぐ安井九兵衛に、川八丁の開発を下命せられたのも恐らくかゝる因縁に繋がる。引き續いて所繁昌の策として、遊所及芝居興行を許され(寛永三)、彼の仕事をば庇護された。かくしてこの土地に芝居が移り、遊所が置かる。この遊所を難波新地とするは(大阪府全志)、時代錯誤も夥しい。難波新地の開発は明和二年のこと(藤井善八覺書)爾後浪花の繁華は江南に、その江南の賑ひは全くこの芝居にとゞめ

を刺すのである。「梅の津や花も芝居も南より」(酒屋鄰)の句はよくその真相を穿つ。西よりすれば筑後・中・角・若太夫・竹田の順。筑後(貞享二)は竹本筑後椽の操芝居、中(寛文元)と角(寛文九)は大歌舞伎、若太夫は豊竹若太夫の操芝居、竹田(寛文二)は竹田近江の機振

芝居と云ふ配合であつた。阿蘭陀人までがかまぬ足を無理しても見たと云ふのが竹田の機振。お上りの衆が國への土産話に天王寺の五重塔と共に、ぜひ見て戻つたのが嵐三右衛門の芝居。その他淨瑠璃・舞・説經あらゆる娛樂は、こゝ江南の道頓堀が獨占してゐた。



南木澤水氏所藏 戲場樂屋圖拾遺 圖三十九第

加ふるに以呂波茶屋の御免(元祿十二)を見、四十七軒のいろはを染め抜きし紺暖簾が(第九十三圖参照)濱側にかゝる。一に芝居茶屋、又は前茶屋とも呼ぶ。専ら觀劇客の面倒を取る。戲場篇に紅粉當茶釜一丈長縮二枚一現銀一見客 棧敷半分 茶次ニ湯桶一 出 飯盛ニ割籠一 來 狂言已果後 正味拂錢回 昔も今も錢次第、かねさへあればこんな重寶な前茶屋を、自由に使ふことが出来る。

安井氏 安井氏は島之内道頓堀の開発者で、その舊居は日本橋北詰北入東側。邸地は慶長年間の拜領に係る。今その址に道頓道下の紀功碑が立つてゐる。碑は府尹大久保利武の發意である(大正四)。用材は先年安治川浚渫のとき獲し坂城用の遺石。

安綿橋 長堀川、總年寄安井九兵衛并に綿屋某の架設。出據設人。
便毒(俗) 長町一丁目より東、高津新地へ通ふ新道拓かる。恰も便毒が横に口を開くやうに。
出據沿革。

四つ橋(俗) 西横堀川と長堀川と出會ふ所、二流十字に土地を四つに仕切る。其鼻を井字に結ぶ

上繫橋・下繫橋・炭屋橋・吉野屋橋の四橋の
總稱、橋上の人・橋下の舟共に繁く、又納
涼に觀月に風景の賞すべきものあれば、俳
人雅客の吟詠甚だ多し。

井字橋頭晚月明 人稀藍水雨新晴

江神似護天公壁 曲欄相圍倒影生 早野思齋

來山の「涼しさに四つ橋四つ渡りけり」の
句碑も有。出據構置。(第九十四圖参照)

立慶町(舊) 道頓堀開鑿に従事せし安井出入



講芳掃華眞 圖四十九第

の百姓の名。出據人名。

六軒(俗) 谷町六丁目觀音坂上に泊茶屋六軒あり。坂下北側の野漠と地續きの岡場所。出據町
勢。

六軒町 南塗師屋町を俗に六軒町と號く、それは河内屋、桔梗屋、美濃屋、堺屋、春木屋、

重井筒屋の青樓六軒あつたのに因る。巢林子の重井筒に、

月は早や渡り初めして中橋や、六軒町の小夜格子、唐土の聖人の曰く、色の徳には隣あり、向ひ兩側輝す軒の燈火日印
に、昨日も今日も明日の夜も、重ね井筒の釣瓶繩、手繰來いと夜のすがらや

小夜格子とは二階の窓を竹格子で造つてあるのを云ふ。

六坊(俗) 千日燒場北横にあつた六坊の地。出據在寺。

井戸の辻(俗) 淨國寺町淨國寺井の迹。後、足洗井と呼びしが、遊女の落籍されて廓を出づるも
の必ず足を此井戸に洗ふ。「足洗ふ」の語今も花柳の巷に傳はる。出據在井。

〔佐古〕

第十五章 區内先賢贈位者小傳

特に區内に關係を有つ贈位者の小傳を編む所以は、郷土の先覺者として後人を感奮せしめること大なるものがあるからである。



鼓銅圖一ノ圖五十九第

住友友芳
贈正五位 大正三年十一月
享保四年十二月 日歿、享年五十二
墓碑天王寺區上本町四丁目寶相寺
法名

略歴 通稱吉左衛門、屋號泉屋。四代の主友芳は父祖の家業を承けて、



鼓銅圖二ノ圖五十九第

浪華爐戸の長たる住友家を實現さした天倫の偉才である。彼は元祿四年伊豫の別子銅山を開坑する外、奥羽の最上備中の吉岡、小泉、陸奥の石ヶ森、蒲生、蟬ヶ平、出羽の幸生、永松、大井島、但馬の明延、小畑、石見の正蓮寺等をも拮据經營した。殊に別子銅山に一大鑛脈を發見するまでには、百折不撓の自信と勇氣とを以て坑夫と寢食を共にして當つたのである。更にこれに南蠻吹（奈無婆無不幾とも書く）の新

精練法を試みて、その結果毎歲七十萬斤以上の純銅を擧げることが出來た。この前代未聞の大收穫には江戸大坂の同業者も、啞然たるの外なかつたのである。又幕府の命にて貨幣の鑄造を行つても、同様に成功を收めてゐる。實に本邦に於ける銅製鍊の大先覺者である。（住友家史垂裕明鑑抄、鼓銅圖録、贈位諸賢傳）

安井市右衛門

贈從五位 大正三年十一月

元和元年五月八日歿、享年八十三

墓碑浪速區河原町一丁目松林庵

法名

略歴 名成安、入道號道頓、河内久寶寺村の人。

父定次と共に豊臣秀吉に仕へ大阪築城の工役に従ふ。その功に依つて城南の地を給はる。城下町の繁盛に伴ひ給地の開發を策し、先づ水利の要を切感し、從弟治兵衛、九兵衛、親族平野藤治と共に、私財を投じ久寶寺村の農民を招きて、舊梅津川の溝擴鑿を目論見む。その延長二十餘町東横堀川より木津川に至る。慶長十七年工事に着手、拮据努力自身で工を督した。偶々工事半にして大阪之役起る。道頓直ちに豊臣方に屬し奮戦の上竟に殉難す。平定後九兵衛以下道頓の遺志を續いで續行、元和元年十一月全く竣成を見るに至る。松平忠明城主となるや、道頓の忠死を憫み、その名を記念すべく道頓堀川と命名したのである。(安井道頓、安井道卜紀功碑銘、大阪人物誌、贈位諸賢傳)

安井九兵衛

贈從五位 大正三年十一月

寛文四年十月十七日歿、享年八十三

墓碑浪速區河原町一丁目松林庵

法名覺了院幽智道十居士

略歴 名定吉、入道號道卜、河内久寶寺村の人。

道頓の從弟に當り織田氏の臣安正の子である。兄治兵衛と共に道頓の開鑿工事を協力す。治兵衛先づ歿し道頓亦戰死するに及び、奮然道頓の遺志を體し、一族平野藤治と共に工を續けて、元和元年十一月恙なく開鑿の業を終はる。城主松平忠明が市街整理を試みた際には、島之内一圓の凡そ四百五十間四方の地の家建取立を命ぜられ、その後も亦幕命を受けて大和町、御前町、九郎右衛門町、久左衛門町、立慶町、吉左衛門町、湊町、宗右衛門町の川八町の開發に苦心したれば、當局者も彼の仕事をば庇援するために、遊所及び芝居興行を許與したのである。江南今日の繁榮は全く九兵衛の霸業である。その子孫代々南組惣年寄を勤む。(安井道頓、安井道卜紀功碑銘、大坂濫觴書一件、大坂三郷町中御取立承傳記、三郷惣年寄家筋書)

道頓堀開鑿者安井道頓に關する一疑問

道頓堀開鑿者に關する通説を先づ洗ひ立て、見る。吉田東博士著『大日本地名辭書』には「道頓堀長堀と並行し其南に在り。慶長十七年市民安井道頓梅津川と呼べる小渠を改修したるものにて元和の初めに竣功せりとぞ云々」

幸田成學士編『大阪市史』には

「道頓堀川中慶長十七年安井道頓二弟治兵衛九兵衛及親戚平野藤次と謀り、豊臣家の許可を得たる上、安井家の故郷久寶寺村○中河内郡より農民を招き、自費を以て工事に著手せしが、明年治兵衛歿し、又主唱者道頓は大阪役に西軍に加里、元和元年城陷るの日亂軍の中に戦死せり」
尙又『大坂濫觴書一件』市史には

『九兵衛儀後剃髮仕、道頓と名改め候てより川堀候に付、道頓堀川と申候々々』

井上正雄氏著『大阪府全志』には

「道頓堀川は今の中河内郡久寶寺村の人安井市右衛門(名は成安、難髮して道頓と稱す)其二弟治兵衛九兵衛及び親戚の平野藤次と共に中開鑿の工事に着手せしが、翌年治兵衛歿し、主唱者たる道頓また大阪方に加はりて元和元年落城のとき亂軍の中に戦死せしかば、兵亂平定の後には九兵衛藤次の二人専ら之に當り、同年十一月略竣成し南堀と呼べり々々」

西村時彦氏撰文磯野氏書贈從五位安井道頓安井道下紀功碑井上氏著大阪府全志所引には

「大正三年十一月聖上幸大阪、追褒先民有功德者、降旨贈位、安井道頓及從弟道下亦並見贈從五位、蓋報開通漕渠之功也、道頓諱成安、稱市右衛門、難髮號道頓、中道頓乃與從弟定清定吉及族人平野藤治等謀、欲開漕渠以便招徠、慶長十七年僦役夫於舊里、捐貲起工、定清稱治兵衛、定吉即道下、稱九兵衛、略翌年定清歿、既而大阪役起、道頓感思義、

奮然投西軍、元和元年五月八日城陷、道頓殉難、於是道下與藤治協理後事、至是歲十一月渠成、略初稱南堀川、辻松平忠明爲大阪城主、憫道頓死事、特錄其遺功、更名道頓堀川云」

即ち知る、道頓堀開鑿の主要人物として孰れも安井道頓を擧げてゐるを。併し『辭書』と『市史』とは唯單に安井道頓と書いてゐるに、「濫觴書」には安井九兵衛號道頓とし、更に『全志』と『紀功碑』には安井道頓諱成安稱市右衛門と書いてゐる。九兵衛か市右衛門か、道頓の通稱は如何との疑問が起つてくる。

頃來筆者は『未吉文書』を繙讀するの機會を恵まれ、其中に如左一節のあるを發見した。これがヒントは東大史料編纂官岩橋君に依りて與へられたもので茲に附記して兄の厚意に深謝する。

「慶長拾七年壬午より平野藤次郎(筆者註、市史全志は藤次)安井九兵衛兄弟(筆者註、九兵衛號道下稱定吉)私親(筆者註、平野)並成安道頓(紀功碑には藤治とある)御公儀様へ申上上下貳拾八町堀之裏向横は、双高八拾間之下自分の銀子にて堀をほり立候道頓儀は大阪御陳之御籠城仕相果候に付て藤次郎九兵衛親次郎兵衛兩三人のものへ下總守様被仰付候々々」

とある。「辭書」と「濫觴書」とは道頓堀の發起者並開鑿者を安井道頓唯一人としてゐるが「市史」と「全志」とには道頓と其二弟治兵衛九兵衛及平野藤次の四名を擧げ、「紀功碑」も同じく四名を擧げてゐるも治兵衛九兵衛の二人を道頓の從弟としてゐる。しかし「文書」に至つては平野藤次郎、安井九兵衛兄弟、平野次郎兵衛、並に道頓の五名を列記してゐる。既に「文書」によつて新に平野次郎兵衛が加はる事になる。唯在來の典據は「安井文書」「安井系譜」「安井氏由緒書」等孰れも安井側の材料に限られてゐる爲に、恐らく平野次郎兵衛をば逸脱したのであらう。

所で、道頓の事であるが、『全志』『紀功碑』の諱成安號道頓とあるを以て、眞に此の成安道頓をば普通にいふ安井道頓であると考へるは果して妥當であらうか。諱號を併稱する呼方とは、ちと常軌を逸してはゐないだらうか。道頓の俗稱も一書に九兵衛とあり、二書に市右衛門とあるより見て、九兵衛道頓以外に、成安道頓てふ別箇の人が存在してゐたのではなからうか。(難波津所載)

藤澤昌藏

贈從四位 大正四年十一月

元治元年十二月十六日歿、享年七十一

墓碑天王寺區生玉寺町齡延寺

法名寂冲院淵穆居士

略歴 名甫、字元發、號東咳、泊園、讚岐香川郡安原村の人、農、幼きより讀本を好むも家貧にして果たさず中山城山の家僕となつて（九歳）徂徠の學を受く。その後山陽九州の諸儒を歴訪し特に長崎にては支那語を修めた。文政七 years 上阪し淡路町に泊園塾（今の泊園寺院の前身）を開き（文政八）子弟を教授す（三二歳）。

學諤園を主とし經世實學を宗とする。深厚なる學識高潔なる人格は諸教の士を愈々多からしめ豊岡藩主松平飛彈守、尼崎藩主松平遠江守も亦示教を乞ふ。藩主高松侯は特に士班に列せしめ（嘉永五）日を定めて經書を大阪の藩邸に講せしむ。元治元年將軍家茂京二條城に召見し、又旨を藩侯に諭し幕府の儒員に聘せんとするも固辭して歸へる。皇室尊崇の念強く徂徠の語と雖も皇室に關すれば弊履の如く捨て、顧みない。故に晩年東咳も亦時風に隨ふと聞くや、慨然七絶を賦

して

闕里文章衆說遷、吾曹所守有師傳、如今豈爲非譽動、一片丹心七十年。

（東咳藤澤先生墓碑銘、東咳先生略傳、浪華人物誌大阪人物誌贈位諸賢傳）

藤澤恒太郎

贈從四位 大正九年二月

大正九年二月二日歿、享年七十九

墓碑天王寺區生玉寺町齡延寺

法名雷風院殿雨化香翁大居士

略歴 名恒、字君成、號南岳、七香齋、香翁、高松侯の儒者藤澤東咳の男、家學を繼ぎて徂徠を奉ずるも章句に至つては敢へて新古に偏しないで一家をなす。又詩文に長じ書をも能くする。慶應元年父の職を襲ひ高松侯の儒員となる。戊辰の役に際し藩論順逆を誤るや起ちて大義名分を説破し死生の間を奔走して一藩をしてよく適歸せしめた。時に年二十有七。後、致仕して大阪に戻り（明治五）再び泊園書院に漢學を講ず。この泊園書院は懷德堂、梅花社の廢滅後も獨り巍然

鷺野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

大田市南河野池

594
13



